拝啓　今年も早や11月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。やっと涼しい秋を迎えたと思っていたら、冬のように寒い日もありました。今年は、異常な気象だったと思います。近所の公園では、きれいとは言えませんが、一応紅葉も進んでいます。

今回は、小西芳之助先生の『ガラテヤ人への手紙講解説教』からの引用の第5回目で今回のエンカウンターの５頁には、次のように書かれています。

「キリスト教は「御霊の宗教」

所詮、キリスト教は「御霊の宗教」であります。人間の理性を超えています。これが、人生に力を与える根源になります。理性で解釈できるものであれば、何もキリスト教に来る必要はありません。聖書に奇跡の多いことはそういうことを暗示してしています。私は、キリスト教の信仰は奇跡であると思います。神の霊が我々に乗り移る。神が我々に下る。これは人間の力ではありません。神の恵みであります。

本日の中心は、やはり、キリストの十字架の贖いであります。最後の 13，14 節はイエスの受難であります。受難の意義は、受難を信じて我々は救われるということであります。私は信じる能力、聞いて信じる、ということは万人に与えられていると思います。その能力は、人間の理性、尊い賜物であろうと思います。19 世紀以来、人間の理性については、非常に強調されてきました。しかし私は、本当の人間の値打ちというものは、むしろ「信じる」ことにあると思います。「信じる」ことは、一つの意志であります。真心、誠実、こういう尊い賜物が人類に与えられていることが、きっと 21 世紀に出て来ると信じています。」

人間の理性を超えているのだから、受ける姿勢が大切、伝える人に対する信頼が重要だと思います。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』10 月 30 日

「人の偉大なること

人の偉大なることは、その人の為すこと、知っていること、所有していること、などによって知ることはできない。その人がどのような人であるかによって知ることができる。そして、どのような人かということは、その人が、先人の遺してくれた偉大なことを、どれだけ本当に学びとって、自分のものにしているか、によって知ることができる。

謙遜になって、偉大なことを毎日学び、自分のものにしようではないか。」

新渡戸稲造先生『一日一言』10 月 27 日

「山のごとく積もる勤務は多くとも、1 年間の用を一日に遂ぐる力もなければ、またその必要もなし。人はただ、その日その日の義務を完了することにて足る。一日の業は、100 年の基礎をもつくるべし、一粒の米に万石の約束あるがごとし。」

松下幸之助先生『道をひらく』「学ぶ心」

『自分一人の頭で考え、自分一人の知恵で生み出したと思っていても、本当にすべてこれ他から教わったものである。

教わらずして、学ばずして、人は何一つ考えられるものではない。幼児は親から、生徒は先生から、後輩は先輩から。そうした今までの数多くの学びの上に立ってこその自分の考えなのである。自分の知恵なのである。だから、良き考え、良き知恵を生み出す人は、同時にまた必ず良き学びの人であるといえよう。

学ぶ心さえあれば、万物すべてこれわが師である。

語らぬ木石、流れる雲、無心の幼児、先輩の厳しい叱責、後輩の純情な忠言、つまりはこの広い宇宙、この人間の長い歴史、どんなに小さいことにでも、どんなに古いことにでも、宇宙の摂理、自然の理法がひそかに脈づいているのである。そしてまた、人間の尊い知恵と体験がにじんでいるのである。

これらすべてに学びたい。どんなことからも、どんな人からも、謙虚に素直に学びたい。すべてに学ぶ心があって、はじめて新しい知恵も生まれてくる。良き知恵も生まれてくる。学ぶ心が繁栄へのまず第一歩なのである。」

内村鑑三先生『続一日一生』10 月 15 日

「日本的キリスト教というは、日本に特別なるキリスト教ではない。日本的キリスト教とは、日本人が、外国の仲人を経ずして、直ちに神より受けたるキリスト教である。その何たるかは一目瞭然である。この意味において、ドイツ的キリスト教がある。英国的キリスト教がある。蘇国的キリスト教がある。米国的キリスト教がある。その他各国のキリスト教がある。そうしてまたこの意味において日本的キリスト教が無くてはならない。然り、既に有るのである。『人の内には、霊魂のあるあり。全能者の息、これに悟りを与う。』（ヨブ記 32・8）とある。日本魂が全能者の息に触れるところに、そこに日本的キリスト教がある。このキリスト教は自由である。独立である。独創的である。生産的である。真のキリスト教はすべて、かくあらねばならない。日本的キリスト教のみ、よく日本と日本人とを救うことができる。」

バークレー先生「ウイリアム・バークレイの一日一章」（10 月 31 日）

「ピレモン

いろんな意味で、ピレモンへの手紙は新約聖書中最も不思議な文章である。オネシモという逃亡奴隷に関する小さな個人的な手紙が、新約聖書の中でどんな役割を果たしているのだろうか。…

なぜこんな手紙が新約聖書の中に入って来ただろうか。確実には分からないが、推測は出来る。パウロの諸書簡が収集・編集され、一巻の書として公刊されたのは、紀元 90 年

エペソにおいてであった、と学者たちは考えている。それから何年か後、アンテオケアの監督イグナチゥスは、アジアの諸教会に手紙を書いていた。その時イグナチウゥスは、ローマに連れていかれるところで、やがてはローマの競技場で、野獣の群れの中に投じられる運命であった。

それらの手紙の中に、エペソの教会に宛てたものがある。その手紙は、エペソの監督――彼の美しい性格、その名前にふさわしい彼の生涯の有益性、――に対して、滅多に見られないような最高の賛辞を呈しているのである。ではそのエペソの監督の名前は何というか。オネシモである。

逃亡奴隷オネシモとエペソの監督オネシモとは同一人物であると、信ずる学者たちがいる。パウロの手紙がエペソに集められた時、オネシモは、自分がかつてなんであったか、またイエス・キリストが自分のためにどういうことをして下さったかをみんなに知ってもらうために、このピレモン宛ての小さな手紙をパウロ書簡集の中に加えるように主張したのだ――学者たちはそう考えているのである。」

カウマン先生『山頂を目指して』11 月 2 日

「神は私達を、日常のありふれた事柄に対して忠実なものとすることによって、更に大いなる職務に堪えるように備えられた。平凡な親切の実行を通して、神は私達を、堂々とした任務に導いて下さるのである。私達の示すほんのわずかな行為は、私達が現在よりもさらに高い尊敬を勝ち得る準備となる。小さな義務を軽蔑する者は、それよりも重要な義務を十分に果たすことはできない。

日々の務
人格をつくり上げるものは
私たちの日常の行動、
私たちの日々の務めである。
私たちの言行、
私たちが苦悩に処する方法、
私達のとる態度、
私たちの楽しんでいる娯楽、
私たちの作る友人である。…
私たちが歩む道中に起こる小さなことが
私たちの人格をつくり上げるのだ。
小さな事が、
神にとって私たちの価値を決めるのだ。

11 月 14 日（火）、本誌読者の佐藤昭夫さんとたちと一緒に美ヶ原の王が鼻へ行きました。この日は、素晴らしい快晴の日で、穂高、槍、常念岳、立山、鹿島槍などの北アルプ

スの山々Hがくっきりと見え、素晴らしい眺望でした。これは、日本で3本の指に入る眺望かも知れないと話し合いました。山も回数を行っているとこんな素晴らしい穏やかな日に遭遇すると思いました。

エンカウンター第260号のウエブサイト版には、過去に出版した本『エペソ人への手紙講解説教』のPDF版を掲載いたします。

新型コロナは、第5類という扱いになりましたが、最近の電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人の方が半分ほどおられます。しばらくは、マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意下さるようお祈り申し上げます。

11月22日

山口周三

エンカウンターの読者各位